

『気がかり症候群』の誕生 ～「自分の問題＝ユーモアと客体化」～

樋野興夫

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授
一般社団法人 がん哲学外来 理事長
「越冬隊 友の会」 顧問

2017年の、『爆笑症候群 & 爆睡症候群』に続いて、2018年早々『気がかり症候群』が誕生した。記念すべき年開けとなった。

筆者が専門とする「病理学」とは、「風貌を診て、心まで診る」学問分野でもある。まさに「個性と多様性」の学びである。「病理学」の使命は「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成である。大局観を持つことが求められる分野でもある。

『爆笑症候群』 : 「存在自体が周囲を明るくする人」

『爆睡症候群』 : 「楽観的に物事を考える人」

『気がかり症候群』: 「自分の問題＝ユーモアと客体化」

と定義されよう。

『爆笑症候群』&『爆睡症候群』&『気がかり症候群』: 人類の3大症候群の華麗なる誕生である。

「達人は、順境も逆境も同じものと考え、喜びも悲しみも 二つとも忘れて、そうしたことを 超越して天命に安んじる。」(新渡戸稲造『逆境を越えてゆく者へ』より)。

『気がかり症候群』の存在意義は、「相手の必要に共感することであり、自分の気持ちで、接しない」ことであろう。

メリッサ (がん哲学外来カフェ参加者)

30数年間専業主婦で母親として生きてきた私は、自分の事はさておき、常に家族の顔色を窺って生きてきました。気がかり症候群第1号を拝命した今、要らない事に悩み、眠れない日々を送ってきた自分とはさよならしたいと思います。簡単には変わらないと思いますが、「相手の必要に共感し、自分の気持ちで接しない」を肝に銘じて生活をしていきます。

息子の発病はつらい出来事でしたが、短期間でいろいろ気づかせて下さった樋野先生や素敵な仲間に出会えた事に感謝しています。

「越冬隊友の会」 副会長 大弥佳寿子

がん哲学に出逢い5年になる私も「気がかり」なことが無くなった訳ではなく、以前に比べてその振幅が小さくなっただけです。

勝海舟の「やるだけのことをやって、後のことは心の中で、そっと心配しておれば良いではないか。 どうせなるようにしかならないよ」の言葉を心の中で繰り返すことがあります。 達人のような境地にはなかなかたどり着けませんが、美しい風景に癒されながら、ユーモアのセンスも研いでいきたいものです。

